【エッセイ】

英語の仮名転写をめぐって

――辞苑閑話・十――

工藤力男

阪神タイガース

タイガースは昭和十一年創立、日本のプロ野球球団で最古のチームの一つの愛称である。球団名はのちに「大阪」、さらに「阪神」と変わるが、愛称の「タイガース」は八十年来変わることがない。

秋田市で生まれ育ったわたしは、中学校に進んで初めて英語を学習した。その学習が少し進んだころ、愛称の「タイガース」に小さな違和感を覚えるようになっていた。母音で終わる「tiger」の複数形による「Tigers」なら、その仮名書きは「タイガーズ」になるはずである。それなのに、球団名の愛称の末尾はなぜ「ス」なのだろう、と。その違和感は海のむこうにも飛び火した。メジャー・リーグの「Yankees」は、日本では「ヤンキース」と読み、かつ書かれているが、これも「ヤンキーズ」とあるべきではないのか、と。

今、メジャー・リーグには三十の球団がある。出野哲也編著『メジャー・リーグ球団史』（言視舎　2018）には、やはり「ヤンキース」としている。長音に続けて同じく「ス」で終わるチーム名は、ほかにタイガース、ドジャースがある。一方で、同じ型なのに「ズ」で終わるロッキーズ、ブルワーズ、フィリーズ、マリナーズ、レンジャーズの五チームがある。この違いは何によるのだろうか。特に、「ヤンキース」と「ロッキーズ」はともに五拍語であるうえに、特殊拍の撥音「ン」・促音「ッ」がそれぞれ第二拍

にあり、続いて長音があるなど、音の排列は酷似している。それなのに、末尾が「ス」と「ズ」に分かれた原因は極めえていない。一つだけ言えること、それは、ロッキーズが廿五年前（1993）創立の若い球団だということである。

インターネットのフリー百科事典「ウィキペディア」で「メジャー・リーグベースボール」を検索したところ、ヤンキース、タイガース、ドジャースの語末は同じく「ス」であった。ほかに、佐藤尚孝編著『最新ＭＬＢ情報　ベースボール英和辞典』（開文社出版　2004）を見ても、この三球団については違いがなかった。

阪急ブレーブス

日本のプロ野球界が二リーグ体制になったとき、パシフィック・リーグに属した球団に「阪急」がある。その愛称は、開幕した四月には「ベアーズ」であったが、五月には「ブレーブス」に改称されたという。わたしが知るのは後者だけで、その「ブレーブ」は勇士・戦士の意の英語「brave」に由来するらしい。

やはり、中学校の英語の時間に学んだ、日本語の「狼」にあたる英単語は「wolf」で、その複数形はwolves〔wulvz〕だったので、Bravesは「ブレーブズ」と仮名書きされるはずである。しかし、語末は清音の仮名「ス」による「ブレーブス」であった。これは何によるのだろうか（ここではブとヴの違いは問わないことにする）。メジャー・リーグにも、阪急球団の愛称と同じ名称の球団があり、上引の出野さんの著書には「アトランタ・ブレーヴス」とある。

ここで、日本のプロ野球球団の名称の流れを、ベースボール・マガジン社編著『日本プロ野球80年史　1934–2014』（2014）によって概観しておく。

最初に生まれた球団は、昭和十一年の「東京セネタース」と「タイガース」である。翌十二年の春季リーグには「イーグルス」が、秋季リーグには「ライオン」が加わって四チームになる。十三年には、巨人、タイガース、阪急、名古屋、セネタース、ライオン、イーグルス、南海、金鯱の九チームになる。十五年に英語の使用が禁止されて、「セネタース」は「翼」に、「イーグルス」は「黒鷲」に変わる。

終戦後、リーグは昭和廿一年に八チームで再開され、廿二年には、前年加入していた「ゴールドスター」が「金星

スターズ」と改名している。日本のプロ野球界に、愛称が「ズ」で終わる球団が初めて誕生したのである。

二リーグ体制後の球団の愛称は、ドラゴンズ、ホエールズ、スワローズ、アトムズ、フライヤーズ、パールズ、オリオンズ、ユニオンズ、バファローズなど、ほとんどが「ズ」終わりである。だが、タイガースとブレーブスは変わらず、イーグルスは現在の「東北楽天ゴールデンイーグルス」まで引き継がれている。

語音構造から考える

「タイガース」の「ガー」に見えるような長音は、固有の日本語では、感嘆詞か擬声語以外には出現しにくい音（おん）であった。漢語についてはなおさらのことである。それにしても、ア列音の長音を受けて「ズ」で終わる語は、日本語としてよほど不自然なのだろうか。そのことを確かめるべく、『広辞苑第四版』に依拠する『逆引き広辞苑』によって、そのような語音構造を有する語を探してみた。

わたしが拾いえた語は、トパーズ、ニッカーズ、ビターズなど、五指をわずかに越える程度に過ぎず、近代漢語の「メーファーズ（没法子）」一語はあるが、固有日本語らしい語は一つもない。ほかに外国人の固有名詞、リチャーズ、シーラーズなど数語が見えるだけである。

前の二節に書いたように、草創期の日本プロ野球界では、その愛称が「ズ」で終わることを避けて「ス」に変える傾向があったようである。そのことを他の面から考える。

日本では「GM（ジーエム）」の略称で呼ばれることもある米国の自動車メーカーの正式名称は、「ゼネラル・モーターズ」と仮名書きされる。ズ終わりである。ウィキペディアによると、先の大戦以前、そのGMのアジア拠点として大阪に設立された会社名は「日本ゼネラルモータース」であった。日本の会社名は、語末が「ス」とされたのである。そのことに触発されて、『職業別電話番号簿』の岐阜市版（2018.12）で「自動車販売」の部分を調べてみた。そこに見える二百八十余の業者名のうちに、濁音「ズ」で終わる「○○モーターズ」は一つもないが、清音「ス」で終わる業者名「○○モータース」は十九を数える。ちなみに、「○○カース」は一つもなく、「○○カーズ」は三つある。

ことは、何も野球チームの愛称に限らなかったらしい。長音に続いて「ズ」で終わる日本語は存在しにくかったの

だ。その原因を究める用意が、今のわたしにはできていない。わずかに考えることは、アクセントが関与しているのか、ということである。「モータース」のような外来語は第一拍が高く発音され、第二拍以下は低くなるが、第五拍まで緊張が持続し難くて、濁音化しにくくなるのだろうか、と。

外来語受容の一面

球団の愛称が右に見たような事情で生まれたとすると、外来語一般にはどんな光景が見えるだろうか。

タイガースについて考え始めたとき、わたしが最初に思い浮かべた語は、英単語「news」が「ニュース」の語形で定着したことである。『日本国語大辞典第二版』（以下、『日国大』と略記）の見出しには「ニュース（英　news）《ニューズ》」とあり、初出例として『当世書生気質』（1885～86）が挙がっている。その第十一回に「東都新報とかいふ新聞」とあって、「新聞」には「ニウス」の振り仮名がある。

次に思い浮かべたのは、「smooth」が長く「スムース」の形で流通したことである。わたしなども若いころは「スムース」と言っていたように思う。『日国大』には、まず勝屋英雄『外来語辞典』（1914）の「スムーズ」が載っている。だが、続く用例は、井伏鱒二『岩田君のクロ』（1938）と野間宏『崩壊感覚』（1948）の「スムース」である。英語の専門家は規範的な語形を伝えようとしたが、世に流布したのは違うのだろう。石綿敏雄『基本外来語辞典』（東京堂出版　1990）のコラムには、つい最近までスムースの形で流通していた、とある。

わたしにとっては全く意外なことであったが、今は余り聞かない、女性の長めの下ばきを指す「ズロース」は、英語「drawer」の複数形の借用によって生まれたのだという。それなら、「ズローズ」の方がまだ原語の音相に近かったはずである。日本語に借用するとき、語末の「ズ」を「ス」に変えたわけである。

英単語「series」を借りた日本語は、上引の勝屋英雄『外来語辞典』には「シリーズ」で見えるが、明治末期から大正初期にかけて、田山花袋の『妻』（1908～09）には「シリース」、『東京の三十年』（1917）には「セリース」で出現している。

最後に「Mrs.」。これは明治期に借用されたまま、「ミセ

ス」の形で固定し、女性向けの雑誌名にさえなっている。

なお、荒川惣兵衛『外来語概説』（三省堂書店　1936）の「外来語の諸相」には、「有声音の無声化」の実例十数語を挙げており、その中に「ハムエッキス（ham and eggs）」が見える。『日国大』の「ハム-エッグ」の項の初出例は、夏目漱石『虞美人草』七（1907）の「ハムエクス」である。楳垣実『日本外来語の研究』（研究社　1963）の「第六章　音韻」にも多くの語例が見えるが、それは右に書いた範囲に収まる。

日本語音韻史から

阪神と阪急、二つの球団の愛称をまとめて考えたい。

日本語音韻史の教えるところによると、時代によって若干の差異はあるが、和語において、「単純語中に濁音が共存することを忌避する傾向があった」（三省堂刊『言語学大辞典セレクション　日本列島の言語』1997）。これは、「規則」とは言いきれないが、かなり強い「傾向」であった。

この二球団の愛称、タイガースとブレーブスは英語由来の命名であるが、名詞の語末音で単数と複数を区別する習慣は日本語にはない。したがって、語末の「S」は複数の目印ではあるが、それによって複合語が形成されると意識されることはなかったはずである。語末に「S」はついているが、球団の愛称は単純語として把握されたであろう。そこに濁音の共存を避ける制約がはたらくのだと解釈できる。

阪神球団については「ガ」と「ズ」が共存することを忌避し、昭和十二年以来の「イーグルス」も、「グ」と「ズ」が共存することを忌避したのだ、と解釈することができる。阪急球団については、「ブレーブ」の二つの「ブ」はいかんともしがたいが、そこにさらに「ズ」を加えて濁音拍の続くことは避けかったに違いない。「ブス」のままに残ったのは無理もないと言えよう。

日本語の音韻構造の傾向による呼び方がメジャーリーグの球団名にも及んだことは先に書いた。日本のプロ野球界では、太平洋戦争後に生まれた球団に「ズ」終わりの愛称が多いことも指摘した。米軍占領下で英語に触れることが多くなり、日本語の音韻の傾向が意識されにくくなったのであろう。

なお、前節で言及した「ニュース」「ミセス」などは、日本語の音韻傾向に関わらない。それなのに、これらの語

の末尾音が、「ズ」ならぬ「ス」で受け入れられたのはなぜかという問題が残る。外来語研究の大先達たる荒川惣兵衛、楳垣実は、これをいわゆる綴り字発音（spelling pronunciation）と解釈している。わたしもその解釈に立っている。そのうえで加えたいことがある。明治初期にこれらを受容した人々の多くは書生であったということである。その受容は耳によるものではなく、多くは目によるものであっただろう。彼らは、自分の目にした「news」や「Mrs.」では、語末の「S」を読んだ違いない。

ジーヴスの怪

中学生時代に感じたプロ球団の愛称への疑問を、六十数年後に考えてみようとした契機は、昨年十二月八日、朝日新聞朝刊の「読書」のペイジにある。その「売れてる本」欄には、文春文庫版、P・G・ウッドハウス著、岩永正勝・小山太一編訳の『ジーヴズの事件簿　才智縦横の巻』を採りあげていた。筆者はコラムニストの速水健朗（はやみずけんろう）さんである。

「皇后の〝積読本〟として突如ジーヴスに注目が集まった。」で始まる八百字ほどの文章中に、主人公の名「ジーヴス」が十一回出現する。その半ばは他書からの引用文中にある。右に書いたように、言及している文春文庫版の書名には「ジーヴズ」とあるのに、である。見事というほかない一徹さを通している。

新聞紙上で、記者の文章と依頼原稿の文章との間に表現の違いがあって、言語観や文体意識の知られることがある。記者は自社や新聞協会の方針によって書くことが多いだろうが、依頼原稿の筆者はそのようなことに余り配慮しないに違いない。だが、今回の速水さんの文章はそれとも違う。対象作品は「ジーヴズの事件簿」なのに、この主人公の名を一貫して「ジーヴス」と書いているのである。

この違いは、日本で多く流通している二つの翻訳書の表記に由来するらしい。すなわち、国書刊行会版では「ジーヴス」、文藝春秋版では「ジーヴズ」と表記されているからである。本欄で、筆者の速水さんは、「ジーヴズ」とする文春文庫版を採りあげながら、論述では国書刊行会版の「ジーヴス」で通したことになる。

刊行の時期は国書刊行会の森村たまき訳が早くて、主人公の名Jeevesは「ジーヴス」で通している。遅れて刊行された文藝春秋版は「ジーヴズ」としている。言わば「森

村ジーブス」対「文春ジーヴズ」が対戦する構図になったわけである。

ふたつの訳書のあり方の違いには、訳者の経歴が関与しているかも知れない。三人ともに翻訳家として著名であるが、森村さんは法学部出身の犯罪学者、岩永さんと小山さんは英米文学専攻の学者である。森村さん訳の『サンキュー、ジーヴス』（国書刊行会　2006）の訳者あとがき（p.351）に「ダグラス・アダムス」が見える。「Adams」の仮名書きが、ジーヴス、タイガースに通うことから、わたしはそのように考えたのである。

謝　辞　成稿にあたって、米国生活の長かった岐阜市在住の英語教育家、河地忍氏から懇切な御教示をうけた。

（平成卅一年二月）

前々稿の訂正

本誌二百四十三号（2018.4）の拙稿、「ケネディとガウディ――辞苑閑話・八――」33ページ、上段の末から三行めに掲げた俳句に「ガウディの城」とあるのは、「ガウディの塔」の誤りでした。作者の佐川氏と読者諸氏に、心からお詫びして訂正いたします。